



## 👁️👁️ みどころ

銀行員は品行方正が第一だが、有名な三大銀行横領事件では、男に貢ぐ女子行員の生態が露わに。しかし、それって特殊な女？いやいや、本作を観れば、ちょっと若く魅力的な男の子がいれば、あなただって・・・。

あの全裸ヌード姿が美しかった宮沢りえも41歳。ちょうどそんな役に適した年齢となり、平凡な主婦がなぜそんな大それたことをしでかしたのかを説得力をもって演じている。

助演女優賞モノの新旧2人の女子行員との「掛け合い」の中で、男とカネに揺れ動く女ゴゴロをしっかりと学びたい。もっとも、コトが露見した後の「弾け方」には多くの男は驚くはず。海外脱出の成功(?)には、思わず拍手だが・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■三大銀行横領事件と男に貢ぐ女たち■□■

あなたは、詐欺罪の法定刑が懲役10年以下であるのに対し、横領罪のそれが5年以下とされていることを知ってる？また、法定刑にそのような差がつけられているのはなぜか知ってる？それは「横領罪は、委託信任関係を裏切る点で知能犯的であり、本権の保護という点では奪取罪と同様に重要な犯罪であるが、自己の支配内にある他人の財物については、他人の占有を侵害して領得する場合に比較して領得がしやすく誘惑的であること、一方、被害者においても信頼すべきでない者に物を委託したという軽率さが認められることから、窃盗罪、詐欺罪などよりも法定刑が軽くなっているのである」と説明されている(大谷實著『刑法講義各論 [新版第4版]』(成文堂刊)300、301頁)。これは、1970年1月26日の21歳の誕生日から司法試験の勉強を1人で始め、団藤重光の『刑法綱要

各論』(創文社刊)を勉強している時に学んだものだが、「誘惑的」という言葉になるほどと感心したことを、今でもはっきり覚えている。

日本で起きた三大銀行横領事件は、①滋賀銀行横領事件(1973年、9億円、奥村彰子(当時42歳))、②足利銀行詐欺横領事件(1975年、2億1000万円、大竹章子(当時23歳))、③三和銀行詐欺横領事件(1981年、1億8000万円、伊藤素子(当時32歳))の3つ。これらはいずれもベテラン女子行員が男に貢ぐために、男を繋ぎとめておくために起こした巨額の横領事件ということが共通しているが、彼女らはなぜそんなことを・・・?

## ■主人公は平凡な主婦、そして真面目な契約社員■

角田光代の『紙の月』を原作とした本作の主人公・梅澤梨花(宮沢りえ)は、わかば銀行月読台支店に勤める41歳の契約社員。舞台は横浜らしい。子供には恵まれていないが、スクリーン上で観る限り、商社勤務の夫・梅澤正文(田辺誠一)と2人で何不自由ない生活を送っている。時代は1994年。既にバブルは崩壊し、翌1995年1月17日には阪神・淡路大震災が神戸方面を襲ったが、梨花たちが住む横浜方面には何の影響もなし。20年後の今から振り返れば、政治的には1993年8月9日に細川連立政権が発足したものの、期待されたような「新しい時代」は到来せず、結果的に「失われた10年」「失われた20年」の時代に入ってしまった時代だ。しかし、そんなことは梨花には何の関係もなかったし、夫との仲はさすがに少し冷めていたが、ほどほど仲良くやっているようだから、多分世間並みの夫婦・・・?

顧客である①裕福な独居老人・平林孝三(石橋蓮司)、②最近認知症気味の名護たまえ(中原ひとみ)、③BMWの話題に花が咲く夫婦2人暮らしの小山内等(佐々木勝彦)と小山内光子(天光真弓)を訪れ、テキパキと現金や通帳を処理している梨花の仕事ぶりをみると、梨花が顧客から相当信頼されており、外回りの仕事に向いていることがよくわかる。そんな梨花に対する井上佑司次長(近藤芳正)の信頼が厚いのも当然だ。そんな梨花が、なぜ巨額の横領事件を・・・?

## ■こんなきっかけで、ホントにこんな関係が・・・?■

男の浮気モノの小説や映画は、渡辺淳一原作の『失楽園』(97年)をはじめとしてたくさんある。「心中」という結末になるのは嫌だが、男の私は不倫に走る男性心理はよくわかるし、不倫にまつわるさまざまなストーリー展開もよくわかる。他方、女(人妻)の浮気モノも『エマニエル夫人』シリーズをはじめとしてたくさんある。日本のTVの昼ドラマでも、つい最近までは『真珠夫人』や『牡丹と薔薇』があったし、今は吉瀬美智子と上戸彩が共演している『昼顔～平日午後3時の恋人たち～』がある。

そんな視点から、私はいつ、どういうきっかけで、どのような展開で真面目でお堅い銀

行員の梨花が、大学生の平林光太(池松壮亮)と肉体関係に入っていくかに注目していたが、それは意外に簡単なものだったのでびっくり。

最初の2人の出会いは、梨花が平林孝三宅へ新商品の勧誘で赴いた際に、孝三から変なモーションをかけられそうになったところ。たまたま、そこに孝三の孫の光太が出現したことによってコトなきを得たが、もしあのままだったら・・・?エロじじい性丸出し金持ちの独居老人と銀行や保険の外交員の女性が不倫関係に陥る構図はAVビデオでは時折見られる(?)が、今年の第27回東京国際映画祭のコンペティション部門で観客賞を受賞した本作(宮沢りえは最優秀女優賞を受賞)ではそんな展開になることはあり得ない。2人の2度目の「出会い」は地下鉄でのすれ違いとなったが、この時点で2人は互いの存在を十分意識したことは明白だ。その結果、3度目の「出会い」も地下鉄でのすれ違いだったが、その直後なんとも意外な展開に。このシーンを見ている限り、人妻の梨花の方から若い大学生の光太にモーションをかけたことは明白だが、その後のラブホテルへの直行はどちらかというとならぬ光太が主導・・・?この展開は予想通りだが、こんなきっかけで、本当にこんな男女の関係が・・・。

この点の説得力の有無が、本作最大のポイントになる。しかし、本作のこのシーンは、吉田大八監督の手の込んだ演出の上に、夫からの関心が薄れていることに寂しさを覚え、どこかで男に飢えている主婦・梨花を演ずる宮沢りえと、あくまで今風の大学生らしく、甘えた風の坊っちゃんながら女のリードにかけてはすでに達人の域に達している(?)イケメン大学生の光太を演ずる池松壮亮の演技力によって、なるほど、なるほど・・・。

## ■この女ゴコロは不可解!なぜそれを吉田大八監督は?■

私は弁護士生活40年の中で夫側、妻側を問わず、たくさんの離婚(調停)事件を処理してきた。したがって、本作の結果、必至になるであろう正文と梨花の離婚問題を考えた場合、「有責配偶者」はどちら?本作後半から展開される梨花の横領行為、さらにクライマックスであつと驚く展開を見せる、梨花の海外脱出行為をみれば、それは明らかだ。しかし、そんな場合でも、もし私が梨花の代理人弁護士として離婚調停や裁判を担当すればきっと、梨花が光太との不倫に走ったのは夫・正文との夫婦生活に不満があったためと主張するはずだ。なるほど、スクリーン上を観ている限り、正文に不貞行為、暴力、悪意の遺棄等々民法が列挙する離婚原因がないことは明らかだが、梨花が主張するであろう「私を構ってくれない」ことは、どこまで夫に対する不平不満、そして離婚の原因になるの?

梨花の横領はわずか1万円からはじまったのも面白い。しかも、それは当然一時的な「立て替え」にすぎなかったから、刑法上は梨花に「不法領得の意思」があったとはいえないはず。したがって仮にそれだけで起訴された場合、私は無罪にする自信がある。しかし、その後の梨花の光太に対する貢ぎぶりや豪遊ぶりをみていると、こりゃ絶対アウト・・・。

金や物品を与えることによって自分への関心や愛情を買うという男女関係は世の中にくいからでもある。そのため、売春はもちろん、愛人契約等々の手を変え品を変えた微妙な男

女関係が古今東西どこにでも存在しているわけだ。本作中盤のスクリーン上で展開される梨花と光太の「愛の姿」は、世の中にいくらでもあるそんな男女関係の一つにすぎないが、かなり徹底しているだけにその様子は面白い。近時、小・中学校で道徳を必修科目にしようとする動きがあるが、私に言わせれば「反面教師」も大事だから、道徳の授業と併せて本作のような不倫ドラマを見せるのも有益では・・・。

## ■□■これなら俺でも。ゲーム感覚の若い世代ならなおさら！■□■

1972年から74年までの司法修習期間中、私は正規の授業として手形交換所見学や近鉄列車試乗さらには現職のスリ担当刑事の後をついてのスリ検挙等々の体験をした。しかし、さすがに銀行の内部奥深くに鎮座する大金庫の見学や窓口での現金や通帳管理、印鑑管理等の業務見学はなかった。しかし、契約社員としてわかば銀行・月読台支店に入った梨花は、給料をもらいながら毎日その仕事をやっているのだから、その業務に少しずつ熟練していくのは当然。梨花の最初の横領行為(?)は、化粧品を買う時に少し現金が不足したため、顧客から預かっていた公金の中から1万円を抜き取って支払い、支店に戻ってから返金したものだ。この横領行為(?)では特段のテクニックは必要なかったが、定期預金として顧客から預かった200万円を一体どうやって横領するの？

本作を観ていると、宮沢りえの熟演(?)もあって、銀行内部で厳重に作られているルールをいかにすり抜けるかというテクニックがよくわかり、面白い。ちなみに、1994年と言えば文章作成ではまだまだワープロ時代で、パソコンやプリンターは個人には十分普及していなかった時代。そんな時代状況の中で、梨花が見せるコピー機等を駆使して定期預金証書や預かり証、さらには支店印を偽造するテクニックは面白い。梨花がもともと真面目で几帳面な性格であることは誰もがわかっていること。支店もそれがわかっているから梨花を採用したわけだが、その真面目さや几帳面さが不法領得行為や偽造という方面で発揮されると、やはりすごいわけだ。私は銀行の各支店の管理システムがどれほど厳しいのかは司法修習のときに体験していないこともあってよくわからないが、梨花のやり方をみていると、これなら俺だって……。何でもゲーム感覚でやってしまう今時の若者なら、こんなシーンをじっくり見ているとホントにやってみようと思える人も現れるのでは……。

## ■□■助演女優賞モノの、新旧2人の女子行員に注目！■□■

本作には契約社員として真面目に勤務している梨花の生き方に大きな影響を及ぼす新旧2人の女子行員が登場するので、それに注目！

第1はどこの銀行にでもいる(かつてはいた?)お局サマ的な存在のベテラン行員・隅より子(小林聡美)。ホントにこんな風にいつもニコリともしないで行内業務をこなしているのかと思うと少しゾッとしてしまうが、その「管理能力」は支店長や井上佑司次長以上

だから、支店にとってはその存在価値は大きい。しかし、経費節減の声の中でリストラが不可避になると、有能だが給料も高い、より子のようなベテラン女子行員は・・・？より子の眼力によって梨花の横領行為がバレてしまうわけだが、井上次長から徹底的に絞り上げられる直前の、より子と梨花との女同士の火花を散らす対決が本作の大きな見どころとなるからそれに注目！



映画「紙の月」ブルーレイ&DVD 絶賛発売中  
©2014「紙の月」製作委員会

他方、2013年の『NHK紅白歌合戦』で突然AKB48からの卒業宣言をした大島優子が、本作では新米の若い行員・相川恵子に扮して、何ともしごい小悪魔的な存在として、折に触れて重要な存在感をみせる。『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマルーム32』125頁参照）や『Seventh Code（セブンスコード）』（13年）（『シネマルーム32』未掲載）に観た前田敦子のすごい演技力にも感心させられたが、本作にみる大島優子の助演女優賞モノの演技力にも注目！

恵子の方は更衣室での梨花とのちょっとした会話がポイントになる。恵子は人生経験の少ない若い女の子なのに、なぜこんなに男女の機微に通じているの？また、ちょっとした服装や態度の変化によって、梨花の心の動きを的確に把握できるの？それって単なる女のカン？それとも何らかの根拠があるの？もっとも、そんなしたたか(?)な恵子でも、梨花と2人でコピーの作業をしながらおしゃべりをしている時、つい「あの人・・・」と口走ってしまったのは大チョンボ・・・？いやいや、これも計算尽く・・・？そこらあたりが男の私にはイマイチわからないが、吉田監督はすべてお見通しなの？さらに、女なら誰でも、本作のわかば銀行月読台支店に勤務する新旧2人の女子行員の行動の意味がわかるはずだから、そんな目線でこの女のバトルを楽しんでもらいたい。ちなみに、社内不倫にさっと見切りをつけて寿退社した恵子のお相手の職業は何と・・・。恵子のあっと驚くそんな人生設計(?)とその変身ぶりにも注目したい。

## ■梨花は男に貢ぐ女？それともホントは強い女？■

「騙されても騙されても男に貢ぐ女」といえば、概ねみじめっらしい女を想像してしまう。近時のTVドラマ『Doctor-X 外科医・大門未知子』にみる米倉涼子や、古くは『ショムニ』にみる江角マキコなどは美貌でも仕事でも自信たっぷりの女。しかし、

騙されても騙されても貢ぐ女は、あらゆる面で自分に自信を持ってない分だけ、カネで男をつなぎ止めようとするしかない。すると、男はますますそれにつけあがってぜいたくになり、さらに力関係の違いが広がっていくという悪循環になるわけだ。

本作の光太をみていると、たしかにハンサムだが、学生のくせにこの女たらしぶりは一体ナニ！男の私はそんな風に腹が立ってくるが、女、とりわけ梨花のような年上の女にはその甘えっぷりも魅力になるのだろう。もともと、光太が梨花からもらったお小遣いを「軍資金」にして同級生らしき若い女の子と手をつないで恋人のように歩いている姿を目撃すると、梨花は……。騙されても騙されても男に貢ぐ女はそれ以降も未練がましく男にすがりつき、下手するとストーカー的存在になってしまう可能性もあるが、さて梨花は……。その後の、キツパリと光太との縁を切ってしまう梨花の行動をみていると、梨花は決して騙されても騙されても貢ぐタイプの女ではなく、逆にホントは強い女であることが明らかになっていく。

梨花が銀行のカネを横領したのは自分のためではなくすべて光太のためだから、光太に見切りをつけてしまえば梨花はもう横領行為をくり返す必要はない。すると、以降少しずつ銀行に返済していけば、犯行を内々の処理で済ますことも理論上はあり得る。しかし、光太との別れを決意した時点での梨花の横領額は数千万円にのぼっていたから、実際にはそんなことは不可能だ。しかも、折悪しくちょうどそんな時、事実上の退職勧告ともいえる「転勤」を命じられていたより子の眼力によって、梨花の横領行為が発覚。その金額は自分のスキャンダル（社内不倫）の発覚を恐れた井上次長によるもみ消しの可能レベルをはるかに超えていたから、ついに梨花は支店長と対峙せざるえないことに。このままでは刑事事件への発展は必至。梨花が土下座でもして全額弁償の誓約でもすれば、ひょっとしてそれを免れることができるかもしれないが、さて梨花は……。？

## ■□■この居直りにビックリ！この疾走に爽快感を！■□■

私は今でも大阪大学の司法試験合格者祝賀会、阪大生の弁護士事務所訪問と懇親会、さらに阪大法律相談部の新年会等々に参加して阪大生の実態をウォッチングしているが、「おとなしい」「積極性が弱い」「面白味がない」という特徴は年々強まるばかりだ。それに比べると、一見ひ弱そうな主婦の片手間のアルバイト仕事にみえる梨花の「居直り」ぶりはすごい。夫との関係でそれが最初に見えたのは、上海への転勤が決まった夫の正文に対して同行を拒否したこと。もちろん、その理由は言わないが、せつかく始まった光太との不倫関係を断ちきるのがイヤだというのがその理由だ。これを聞いた夫はアレレと思い、この妻の変身ぶりには何か理由があるはずと考えるのが普通だが、本作では「論点」が広がるのを避けるため、夫の正文はおバカで人の良いキャラに設定されている。そのため、正文は渋々梨花の主張を受け入れることに。

他方、職場でのあつと驚く梨花の居直りぶりは、井上次長から横領行為を暴かれようと

したとき、何ともタイミング良く「私の不正を公表するのなら、次長と恵子との社内不倫も公表しますよ。」とばかりの絶妙の言い回しをした時だ。こんな言い回しは、バッジを付けたばかりの弁護士ではできず、それなりの人生経験をしていなければ到底ムリ。かつて、オウム真理教が大きな社会問題となっていた時の、「ああいえば、上祐」こと上祐史浩なら当然それができるだろうが、なぜ家庭の主婦にすぎない梨花がそんなセリフをしゃべることができたの？

さらに、本作で宮沢りえは第27回東京国際映画祭で最優秀女優賞を受賞したが、それはなぜ？それは本作全編でみせる内面に秘めた強さ＝悪女ぶり(?)の演技が評価されたためだが、その決定的ポイントは銀行のガラスをイスで叩き割った上での、全力疾走による脱出シーンにある。いくら警察の検挙率が落ちたとはいえ、まだまだ日本は治安の良い国だから、銀行の制服を着たままいくら全力疾走しても、現実にはそう簡単に逃亡できるとは思えない。しかし、本作にみる宮沢りえ扮する梨花の疾走ぶりをみると、ひょっとしてこのまま逃げ切れるのでは・・・?そんな「期待」を持たせてくれる。そして、このシーンを観た多くの観客は、現実それを期待しかつ応援するはずだ。

## ■ラストシーンには賛否両論が・・・■

本作ラストには、それまでの緊張感から一転する「別世界」が登場するので、それに注目！東南アジアで有数の5000万人超の人口を有するミャンマー（旧名ビルマ）は、2011年春の民政移管後、急速に消費事情が拡大している。来年秋には総選挙も実施されるし、今年10月には関西国際空港からミャンマーのかつての首都ヤンゴンへの直行便も就航した。この民主化路線、自由経済路線が続けば、ミャンマーは中国、ベトナム以上の日本の経済パートナーになる可能性が強い。

そんなミャンマーに対して、かつて日本との経済交流が盛んだったタイは今大変だ。すなわち、国家安全保障会議事務局長の人事問題に不当介入したとの理由で2014年にインラック前首相が辞任した後は、インラックの兄であるタクシン元首相を中心とするグループと、官僚や軍を中心とする反タクシングループとの権力闘争による政情不安がずっと続いている。

しかして、本作ラストの舞台は、そのタイのバンコクだ。ええー、どうして梨花がタイのバンコクに？このラストにはあっと驚かされたが、そんなシーンを見せられると、私を含めた観客の「想像力」が急に膨らみ始めるはずだ。もともと、数千万円の横領犯罪の犯人をノコノコと海外に逃亡させたのでは、日本の警察の面子は丸つぶれ。したがって、ホントにこんな現実があり得るのかどうかは疑問だが、そこは映画だから何でもありだ。本作のそんなラストシーンに、あなたは賛成？それとも異議あり？

2014（平成26）年11月27日記